

格助詞「にて」の形成と言語における交替現象

添田, 建治郎

<https://doi.org/10.15017/12205>

出版情報 : 語文研究. 29, pp.40-56, 1970-11-30. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :



格助詞「にて」の形成と

言語における交替現象

添 田 建 治 郎

(一) はじめに

この報告にあたり、結論を得たいと願った課題は、詞辞連合のどの様な形態から、いかなる経過をたどって、複合の辞、または単一の辞が形成されていくのか、つまり、言語における交替現象の具体的な形態に関してであった。

その一特殊な場合として、かつて、二語「と・て」、接続助詞「とて」、副助詞「とて」を取り上げて考察したことがあった。結論の詳細については、今は触れないこととするが、一言で言えば、二つの助詞「と」と「て」とに挟まれた動詞「いふ」が、形式的表現と化して、助動詞と解される段階に至って省略され、複合の辞、または単一の辞を形成し、その後、単一の辞「とて」の形態において、機能の用法を拡大していく、その場合に、「とて」成立の起源となった形態も、また、新たに形成された「とて」という形態も併存しているということであった。

この度は、格助詞「にて」の形成を取り上げて考察し、先に

述べた課題、「言語における交替現象の具体を明らかにする」の、今一方の特殊な場合における解答を求め、「とて」、「にて」の形成について、互いの結論の傍証としたいと考える。

註1、二語「と・て」とは、

只ともかくも御心しておぼさんかたにしなし給へとの給へばをと
て立ぬ (落窪物語)

の様な引用文(発語文)を引用するものを、また副助詞「とて」とは、

としへぬる古里とてことにみすてがたきこともなし(源氏物語)
の様に意味を限定する副助詞としての用法をそれぞれ指して用いた。

(山口大学卒業論文)

(二) これまでの研究

格助詞「にて」の成立に関し、通説(後述)に対してなされたこれまでの研究の到達段階を概観してみると、山田孝雄氏は、『日本文学概論』658ページに、

上の「に」と「して」との結合體たる「にして」はその中間の「し」を略して「にて」とすることあり。この「にて」も亦「にして」と同じく種々の用法をあらはすものなり。

と説明されておられる。佐伯梅友氏も同様に『國語學』(第26集)4ページに、「『にあり』から『である』へ」と題して、山崎良幸氏は、『日本の文法機能に関する研究』(風間書房刊)471ページに、また倉持保男氏は、『國文學』(昭和42・1臨時増刊号)53ページにおいて、同一趣旨の説明をそれぞれなしておられる。なお、春日和男氏は、山田孝雄氏が『日本文法論』788ページで、「『あり』と『す』との交渉」と題して、

「あり」が存在の義よりして單に決定要素を示し各種の語に熟合して其の存在性をあらはせることは既に述べたり。「す」も亦其の普遍的動作を示すより一轉して一種の決素詞となれること頗多し。こゝに於いて「あり」と「す」との交渉生ず。

「す」が單に決素となれるものは殆其の動作性を亡失し「あり」の決素となれるものと其の作用に於いて更に異なることなし。

と説明された指摘を受けて、『存在詞に関する研究』(風間書房刊)32―33ページにおいて、「あり」と「す」との交替の可能性を、その論拠を種々の場合にわたって示しながら、全般的に説明されているが、氏の論は、「『にて』の成立」のみに限定しての論ではない。

以上の人々の立場は、「格助詞『に』+動詞(助動詞)『す』の連用形『し』+接続助詞『て』の形態から、『し』を略することによって格助詞『にて』が成立したとする立場」というこ

とでまとめられるものである。

これに対して一方には、松村明氏が、『國文學』(昭和34・7)58、59ページで、

「にて」は元來「に」と「て」とが複合してできた語である。「に」は格助詞、「て」は接続助詞からでたものと考えられるが一般であるが、発生を考える場合には格助詞の「に」と接続助詞の「て」とからできたというよりはむしろ、「に」と「て」とが複合した「にて」という語から、格助詞としての機能のものができてきたと見るべきであろう。

と述べておられる様に、「『に』と『て』との複合、次いで格助詞『にて』がそこから成立する。」という立場のものがあるわけで、この立場を鈴木英夫氏も、『現代語助動詞詳説』(学燈社刊)367ページで述べておられる。

現在までのところ、格助詞「にて」の成立については、大別してこの二つの考え方がたてられているとみられる。これらの考え方の上に、次の二つの課題をたてて、格助詞「にて」の成立を考えていくこととしたい。

(1)場所をあらわす格助詞「にて」の成立という観点から、松村明氏の論の検討。

(2)状態、原因、手段、方便、資格、年令をあらわす格助詞「にて」と、場所をあらわす格助詞「にて」との、成立時における関係をもとにして、格助詞「にて」のすべての用法の成立をいかに説明するか。

この二つである。

(三) 格助詞「にて」の成立

(1) 場所をあらわす格助詞「にて」の成立という観点から、
松村明氏の論の検討。

先に紹介した松村明氏の論は、これまでの通説への警鐘として、傾聴に値するものと思うが、同時に問題となる点も含んでいる。通説のいう「格助詞に直接接続助詞が下接したものの非は、佐伯梅友氏が、『國語學』(第26集)で指摘されたところであり、一般論としても、「接続助詞『て』は本来は用言に下接する」ということで通説の立場は弱い。松村氏の考えの前半部(「一般であるが、発生を考える場合には」のくだり)の表現は、その点に対する配慮であろうが、後半部には納得のいかないものが残る。私は、春日和男氏の考え方を足場に、その上に成立後の「にて」の用法の種々相をとらえながらできうる限り、帰納的結論を導き出す様、努めるつもりである。その過程で、松村明氏の考え方への検討も、一般論とはまた異なった角度から成し得ると考えている。

まず、格助詞「にて」の用法の中で、後世最も多く用例を見ることができる、場所をあらわす格助詞「にて」の成立過程について考えていくこととする。格助詞「にて」の成立頭初の用法は、別表1に見えており、それは連用修飾格としての、場所をあらわすものに限定されている。今、格助詞「にて」の初出例を見出すことのできる万葉集において、場所をあらわす格助詞「にて」の用例を検してみると、次の三例を見出す。

1、還るべく時は成りけり京師にて(公而) 誰が手本をかわ

が枕かむ

(万葉集、卷3/439番)

2、旅にて(公呂)も喪無く早来と吾妹子が結びし紐はなれにけるかも (同、15/371)

3、家にて(公底)もたゆたふ命波の上に浮きてし居れば奥處知らずも (同、17/3896)

この内、資料2の「旅にて」の「に」も、資料3の「家にて」の「に」と同じく、場所をあらわす格助詞であったことは、家にあれば(家有者)筈にもる飯を草枕旅にしあれば(旅

公之有者) 椎の葉にもる

(万葉集2/142)

の歌の傍線部、「家にあれば」と「旅にしあれば」との対応から見ても十分明らかである。今、この資料1、2、3に、便宜それぞれ次のI、II、IIIを対応させてみる。

I、これやこの大和にして(公四手)はわが恋ふる紀路にありとふ名に負ふ背の山 (万葉集1/35)

II(イ)旅にありて(客在而)恋ふれば苦しいつしかも都に行きて吾が目を見む (同12/316)

(ロ)旅にして(公為而)妻恋すらし霍公鳥神名火山にさ夜ふけて鳴く (同10/1938)

(ハ)旅にして(公之呂)物思ふ時に霍公鳥もとな勿鳴きを吾が恋まさる (同15/378)

(ニ)旅にして(公有而)物を所思ふ白波の邊にも沖にも寄すとは無しに (同12/3158)

III(イ)家において(公阿利呂)母がとり見ば慰むる心はあらまし死なば死ぬとも (同5/889)

(ロ)家にして(公之臣)恋ひつつあらずは汝が佩ける太刀に

なりても齎ひてしかも

(同 20/434)

この(1—1)、(2—1)、(3—1)の対応をみる時に、それぞれにおいて、「にありて」、「にして」、「にて」の上接語が、「地名、旅、家」という具合に同一であることが看取される。が、これのみをもってしては、「にありて」、「にして」、「にて」を同一資格の表現と断定することはできない。し、これら「にありて」、「にして」、「にて」を含む句が、ひとまとまりとして、「主体(主語)の存在する場所をあらわす」という表現場面になつてゐることは、いずれも否定できず、一歩を進めて、「にありて」、「にして」、「にて」が、場所をあらわす同等の表現としての可能性のあることは、少くとも指摘することができる。つまり、これだけの資料を示すことによつても、「あり」¹「し」²「零」³という式としては十分に成り立ち得ると思ふ。そして、この様なアラビア数字とローマ数字とで示した対応が、「にありて」、「にして」、「にて」の表現上の近似関係を示すにとどまらず、「あり」、「し」、「零」互いに相当する表現(以下「あり」¹「し」²「零」³であらわす)として意識されていた⁴という有意性を示すものであることを、次の資料をもとに説いていきたいと考える。

4、ここに(此間在而) 筑紫や何處白雲のたなびく山の方にしあるらし
(万葉集 4/574)

5、ここに(此間為而) 家やも何處白雲のたなびく山を越えて来にけり
(同、3/287)

破線を施した部分は、全く同等の表現場面になつものである。

たゞ、資料4の場合、『万葉集 本文篇』(塙書房刊)が、また『注釋』、『全注釋』、『私注』が訓んでゐることく、「ここにありて」とも訓める字面である。『万葉集 本文篇』等の様に「ここにありて」と訓む場合には、資料4と5とが共存している事実から、「あり」と「し」とが同等表現のものとして、交替の可能性のあることを示すものであろうし、また、資料4に訓んだ様に「ここにありて」とする場合、「在」の字が、「し」とも訓むことのあることを示していると言える(IIの[12/3158]の場合も同様)。前者の場合、つまり、「ここにありて」と訓んだ場合、「あり」¹「し」²が成り立つと考えられるわけであり後者の場合、つまり、「ここにありて」と訓んだ場合にも、「在」の字を、「し」と訓む様な場面に使うという、その背景に、「あり」¹「し」²の関係が、表現主体に意識されてゐることが条件として考えられるのである。

この様に見てくると、先に述べた、アラビア数字とローマ数字の対応が、一層意味あるものとなり、「家にありて」と「家にして」とが、また、「旅にありて」と「旅にして」とが、同等表現のものと考えられ、代替可能ということでの「あり」¹「し」²というところまでは証明し得たと言ひ得る。それでは、それが「零」に相当することは、いかにして説明されるべきであらうか。別表2に示したのは、格助詞「にして」、「にて」の内であるが、同じく状態、原因、手段、方便、資格、年令の用法を一括して採つた別表3と比べて顕著に異なる現象がみられるがこの両別表が異なる分布現象を呈する理由については、また後

に述べることをして、ここでは取りあえず、別表2を見ていくこととする。

まず、地の文に限って見ると、宣命においては「にして」であらわしていた場所の意味が、竹取物語以後は「にて」によって多く荷なわれていることが看取される。和歌においても、万葉集に萌芽をみせた場所をあらわす格助詞「にて」が、万葉集でこそ「にして」22例に対して「にて」3例と、や、「にして」に一步を譲ってはいらぬものの、竹取物語以後は、全く「にて」の独壇場の感がある。つまり、場所をあらわす格助詞の用法は、万葉集を境として、それ以前は「にして」、以後は「にて」でもって荷なわれているといえる。別表3が、別表2とは異なつた分布現象、つまり、最初から「にて」の形態での用例が多くみられるということ、それに、守旧的表现をこととする和歌において、場所をあらわす格助詞「にて」が、別表2にみる様に、万葉集から登場し、別表3（別表1）によれば、それが他の意味用法をもつことなく土左日記まで続いているのに対し、同じ和歌にあつて、状態、原因、手段、方便、資格、年令をあらわす格助詞「にて」は、別表3にみる様に、文献資料による限りでは伊勢物語が初出で、古今集には皆無であること、などは共々、場所をあらわす格助詞「にて」と、状態、原因、手段、方便、資格、年令をあらわす格助詞「にて」とが、別途の成立の過程をたどつたことを意味し、別表3を、「にて」自身内部での意味的わたり行きによる用法の拡大の事実を示すものであるとするならば、それとは異なつた成立の仕方が、場所をあらわす格助詞「にて」にはあつたと考えられる。「し」と「零」との

交替の可能性、つまり、「し」―「零」の成り立つ可能性は、また強まつたということができる。

今一つ、「にありて」↓「にして」↓「にて」の変遷を証する、注目に値する現象がみられる。別表4は、「家、道、旅、ここ、よそ」に、いかなる語が下接して「主体（主語）の存在する場所」をあらわしているかをみたものである。これによる、万葉集においてこそ、「にありて」、「にして」、「にて」の三種がみられるのであるが、以後は「にて」によって行なわれ、表現としても慣用化している。例えば、「ここに」の例は、文献資料による限りでは、後撰集の詞書の例がその初めであるが、これなどは、「にありて」から「にして」、次いで「にて」へ、のかつて起こつた一連の変遷を、後世の人々が学んだ結果と言ふべきではないかとも思う。ともあれ、「にありて」↓「にして」↓「にて」の変遷の過程は、実質性のある表現としての、「或る場所にある」ことから、その形式化した表現へ。そして、「もののある場所そのもの」をあらわす様になつてきた過程であつたということである。

この「あり」―「し」―「零」の妥当であることの証左として、同様の変遷例を他に求めて傍証としたいと思う。

6、よそにゐて（外居而）恋ふるは苦し吾妹子をつぎて相見む事許せよ（万葉集4/756）

7、よそにしてこふればくるしいれひものおなじ心にいざやむすびてん（古今集11/541）

8、よそにても花見ることになをぞなくわが身にうとき春のつらさに（後撰集3/87₉）

この内、資料6、7の破線部分は、類似した表現場面におけるものであり、この対応から「ゐ」と「し」とが交替可能なものとしてあり、しかも、資料6、7、8共に同じく「よそ」に下接し、第一句にあつて、一句全体で「主体（主語）の存在する場所」をあらわしている。加えて、別表4にみる様に、「よそにゐて」から「よそにして」へ、そして、「よそにて」へ、との変遷とみることができ、以上総合して、「ゐ」―「し」―「零」の成り立つことが明らかである。この結論は、先の「あり」―「し」―「零」の考えと、相互補充の關係にたつものである。つまり、「ゐ」―「し」―「零」の、一方における成立は、「あり」―「し」―「零」の成立する十分な傍証になると思う。

以上、場所をあらわす格助詞「にて」の成立は、山田孝雄氏が、『日本文法論』788ページで述べておられた様に、「あり」と「し」とが相当のものとして意識され、次いで山崎良幸氏が、『語本の文法機能に關する研究』471ページで言われた様に、その「し」が本来持っていた、動作・作用の概念を失なつて、判断をあらわす、助動詞に転じ（陳述の有無が分明でない故、便宜格助詞「にして」に分類した。）その「し」が結局省略されていくのである。その過程というのは、

9、広橋を馬越しがねて心のみ妹がり遣りて吾は此處こゝにして
（万葉集14/3538）
（糸思天）

の「し」の様な、動作・作用などの実質性を未だに持った述定力のある形態から、述定力を消失していく過程であるということができると思う。場所をあらわす格助詞「に」+動詞「あり」

の連用形「あり」+接続助詞「て」、という形態から、同じ格助詞「に」+動詞「す」の連用形「し」+接続助詞「て」へ、次いで、同じ格助詞「に」+動詞「す」の形式化した、助動詞「す」、その連用形「し」+接続助詞「て」へ、そして、「し」を省略して、場所をあらわす格助詞「にて」へ、という過程である。以上の、場所をあらわす格助詞「にて」の成立についてみれば、私の立場からは、松村明氏の考え方の後半部には疑問が残る。

註2、同論文4ページの6―8行。

3、別表1は格助詞「にて」を意味用法によつて各作品中にみた分布表である。別表1は和歌において、後出の別表7は地の文において作成したものである。発語文、心中思惟文、手紙文の用例数は少なく、この場合有意味的とは判断できず引かなかつた。

4、佐竹昭広、木下正俊、小島憲之共著の『万葉集本文』、澤瀨久孝氏の『注釋』、武田祐吉氏の『全註釋』、土屋文明氏の『私注』、いずれも「にありて」と訓む。

5、例えば、

舟にてみまかる
 舟にては場所をあらわし、一方に、
 舟にてわたる

が手段をあらわす「にて」であるような事態があるからである。同様の例として、

此處にして（此間在而）春日や何處雨障り出でて行かねば恋ひ
 つつそ居る（万葉集8/1570）
 がある。

- 7、原因の意味用法は、状態、手段、方便、資格、年令とはまた異なる発生のものと考え、○で囲んで別に記した。
- 8、場所をあらわす格助詞「に」は取り上げない。
- 9、「よそにして」、「よそにて」の例は、万葉集、新撰万葉集にそれぞれ早く姿をみせるが、説明の都合上、資料6、7、8に示した例を使用した。

- 10、この「にして」は格助詞とはみられない。
- 11、これを格助詞「にして」と規定するに従う。

(2) 状態、原因、手段、方便、資格、年令をあらわす格助詞「にて」と、場所をあらわす格助詞「にて」との、成立時における関係をもとにして、格助詞「にて」のすべての用法の成立をいかに説明するか。

中古における格助詞「にて」の意味用法は、既述した、場所をあらわすもののみ限定されたものではなく、状態、原因、手段、方便、資格、年令などの意味用法がみえている。格助詞「にて」の成立をいう時には、これらの意味用法の成立をも含めて説明されなければならない。場所をあらわす格助詞「にて」の成立の経過として、(1)で述べた様な私案のごとき過程があったとしても、その様な成立過程が、格助詞「にて」の意味用法のどこまでを説明し得るのか、どこから以後は別種の説明を要するのか、その点を明らかにする必要があると思う。今、考えられる格助詞「にて」の用法の成立の道筋を列挙すると、

- ①、「にありて」↓格助詞「にして」の全意味用法↓これをそのまゝ、受け継いで、格助詞「にて」の全意味用法。
- ②、「にありて」↓場所をあらわす格助詞「にして」↓場所をあらわす格助詞「にて」↓意味的わたり行きによる格助詞「にて」の全意味用法。
- ③(イ)「にありて」↓場所をあらわす格助詞「にして」↓場所をあらわす格助詞「にて」。
- (ロ)助動詞「にて」↓状態をあらわす格助詞「にて」↓意味的わたり行きによる格助詞「にて」の、場所以外の意味用法。

④(イ)、③の(イ)と同様。

(ロ)助動詞「にて」↓状態をあらわす格助詞「にて」↓意味的わたり行きによる格助詞「にて」の、場所、原因以外の意味用法。

(イ)「によりて」↓原因をあらわす格助詞「にて」。

以上四つである。言語における交替現象を考える立場から、詞の複合したどの様な形態から辞がいかにして成立するのか、その一特殊の場合として、格助詞「にて」のすべての意味用法の成立を考えていきたいと思う。

まず、①の考え方の検討から始めたいと思う。別表5、6は、格助詞「にして」の、地の文と和歌文中の用例の分布を示したものであるが、いずれも、場所をあらわす用法に用例が集中している。一方、別表7をみると、状態、原因の用法が、文献資料による限りでは、竹取物語に初出例が見出されて、順次、手段、方便、資格とあらわれ、年令の意味用法が一番遅くに大和

物語に初見される。以上において、格助詞「にして」自身に、格助詞「にて」にみられるすべての意味用法が揃っているという事実は指摘されず、当然のことながら、結局格助詞「にして」の意味用法をそのまゝ受け継ぐことによつて、格助詞「にて」の全意味用法が成立したという様なことは考えられない。格助詞「にて」の意味用法の獲得の仕方は、むしろ段階的というべきである。これらことからして、①による説明は妥当とは思われない。

次に、②の考え方の検討に移ることとする。②にあつては、場所をあらわす格助詞「にて」の成立については(1)に説明した立場を踏襲しているが、問題となるのは、その場所をあらわす格助詞「にて」から、発展的に状態、原因、手段、方便、資格、年令などの意味用法が生まれてくるものであるかどうかということである。場所をあらわす格助詞「にて」それ自体が、状態、原因、手段、方便、資格、年令と意味的にわたり行くことは考え難いと思われるが、格助詞「に」に場所をあらわす用法があり、一方に、同じ格助詞「に」が原因や時をあらわし得ることから、格助詞「に」と同じ様に場所をあらわし得るところの格助詞「にて」に対して、類推を力として、その原因、時の意味が新たに付与されることはないであろうかとの疑問が残る。しかし、それでは、時をあらわす「に」の意味が加わつて生まれたと考え得る年令の用法はよいとしても、年令の用法より早く例のみえる状態、手段、方便、資格の「にて」の成立をいかに説明すべきか、何故年令の用法の成立が一番遅れることになつたのか。②の考え方は、この点についての説明に説得力をも

たない。再考の余地は残しておくにしても、同じ類推がもつと起こり易い場面がある様に思うのである。それを次に含み述べることにして、③の考え方の検討に移りたいと思うが、③、④の考え方にあつては、たゞ原因をあらわす格助詞「にて」の成立の一点についてのみ説明が異なるものである故、一致する点についてはあわせて考察することとする。

連用修飾格としての、状態をあらわす格助詞「にて」は、場所をあらわす用法に次いで古く、竹取物語から例がみえている。

10、御かりみゆきし給はんやうにてみてんや (竹取物語、56ページ)

この状態をあらわす格助詞「にて」が、場所をあらわす用法から意味的にわたり動いて、発展的に用法を拡大した結果成立したとする考え方には疑問の残ることは先に述べておいたが、例えば格助詞「に」における原因や時の意が、そこに類推、付与されたと考えることによつてこの疑問を解くよりも、もっと合理的な別の考え方、場面がある様に思う。

11、これをみてうちとなる人の心と物におそわる、ようにてあひた、かはん心もなかりけり (竹取物語、63ページ)

12、人々あさましがりてよりてか、へたてまつれり御めはし、らめにて、ふし給へり (竹取物語、52ページ)

13、大臣これを見給ひてかほは草の葉の色にて居給へり (竹取物語、44ページ)

14、御子はたつもはしたるもはしたにてる給へり

15、やぎのやすのりといふひとあり。(竹取物語、40ページ)
はしきやうにてむまのはなむけしたる。(中略)これぞた、

(土左日記、28ページ)

16、なんでう心ちすればかく物を思ひたるさまにて月を見た
まふぞ (竹取物語、56ページ)

例えば、資料11の「にて」の前件は、「内外なる人の心ども」の状態について肯定判断をなしたもので、後件は、主語「心」、述部「なかりけり」という構成であつて、前件に対して独立した文を形成しており、前、後半は格関係にはたつてはいない。つまり、「にて」は明らかに助動詞「なり」の連用形「に」+接続助詞「て」の形の助動詞「にて」の中止法としての用法である。これに対して資料12が11と異なる点は、「にて」の後件における述部「ふしたまへり」の主語「中納言」が伏せられてある点にある。資料11における後件の主語「心」に相当する位置の語が略されているわけである。「にて」の前件中の「御め」は「ふし給へり」の主語ではなく、述部「しらめにて」の主語であるわけで、「にて」は中止法の用法を保った助動詞であり、後件は、前件に対して独立性が依然として残る。資料13は、「にて」の後半の述部「居給へり」の主語「大臣」が前件中にもえられている形であつて、その「大臣」―「居給へり」の構文が、前件中の「かほ」―「色にて」の構文を包みこんでいる形をとり、「にて」の中止法の意味合いがや、薄れている様である。資料14は、「はしたにて」と「る給へり」の主語が共に「御子」と解されるもので、その点資料13よりも一歩進んで「にて」は中

止法の意味合いを薄くし、連用修飾格にたつとみられるが、助動詞の中止法と解しうる場合がまだ散見する。資料15も一見すると、14と同様に考えられそうであるが、「これ」―「したる」は結びの上からも明らかな構文であつて、「た、はしきやうにては」「むまのはなむけす」という行為を状態的に単に修飾したものにすぎず、「これ」―「したる」の構文の中に包みこまれてゐる。つまり、「にて」に中止法の意味合いがなくなり前後件は、前件が後件の意味に限定を与えたりする、謂ゆる装定的格関係にあるわけで、連用修飾格にたつてゐるといえる。それは、共々「にて」の前件の述定性の消失と後件の独立性の消失ということの意味するものであり、それが直接的に状態をあらわす格助詞「にて」の成立をもたらしたものであろうがその背景には、右に述べた文構造上の変化が一つにはあり、二つには、助動詞「にて」が上接語に状態性の体言を持つ場合のあつたことが考えられる。たゞ、状態性の体言を上接すれば格助詞としての状態の意味用法が生まれてくるというわけのものでないことは、状態性の体言に下接しながら、助動詞としての用法のまゝである例が数多いことから明きらかである。¹³以上の説明から、

状態についての肯定判断をなす助動詞「にて」↓状態をあらわす格助詞「にて」

の成立過程のあつたことを考える。この状態をあらわす格助詞「にて」からならば、手段、方便、資格、年令をあらわす「にて」が、意味的わたり行きによつて形成されることは、容易に説明することができそうである。

17、けふすぎばしなまし物を夢にてもいづこをはかときみが
とはまし (後撰集10/641)

18、うつ、にてたれちぎりけん定めなき夢路にまどふわれは
われかは (後撰集11/712)

この例の様な状態をあらわす格助詞「にて」にあつて、そういう状態を伴ないながら、後件の行為(傍点部分)がなされ、一定時間継続の後に至つて、その様な状態にあること、または積極的に、その様な状態に置くことが、「にて」以下の行為をもたらず条件なり、手段なりとして意識される様になれば、手段をあらわす格助詞の意味用法が生まれ、定着する。

19、さてしにたるともこの人のあらむやうをゆめにてもうつ
、にてもききませたまへ (大和物語、168段)

20、・・とのたまはせたればたはぶれにてもき聞えさせ給は
せしことなればかたじけなくまゐりぬ

(紫式部日記、475べ)

これらはその典型である。この手段が、時に応じての特別な便宜の手段という一面が強く出ることになれば、方便としての用法となるのである。

21、はをはじめめるをはてにてながめをかけて時の哥よめと人
のいひければよみける (古今集、10/468)

他の組み合わせで歌を詠むことも考えられるのに、「こゝでは」はをはじめめるをはて」として詠んだもので、詠歌の便宜の手段となつてゐるのである。手段方便は意味的に近接した用法である。

一方、状態の用法が手段の用法に漸次わたり行くことの証左

として、

22、御歌をよみてつかはすかやうに御心をたがひになぐさめ
給ほに・ (竹取物語、58ページ)

の例をあげることができる。「かやうに」は連用修飾格にたち「なぐさめ」る時の態度を状态的に示している。それが手段の様に理解される様になることは、資料22の解釈にあたつても読み取ることができ、一方に「木活字十行甲本」ではこの部分「かやうにて」とあつて、「御歌をよみてつかはす」ことを「なぐさめ」るための手段としてゐることが窺える。

23、御せうとほりかはおと・たらうくにつねの大納言まだ
下らうにて内へまいりたまふに・ (伊勢物語、6段)

これは先の説明で言えば、資料14の「前後件の主語が等しい」という段階にあたるもので、「内へまいる」行為に付随して、「まだ下らう」であるという主体(主語)の状態(状況)が共にそこにあることを示している。かゝる後件における行為に相伴つて付随する状態(状況)が、その行為に際して或る一定期間必ずついて回り、その行為をもたらず条件ともなり、第三者もその状態を行為者にとつてあるべき姿として理解するとき、後件の行為をもたらずその条件が、社会的なある地位、資格となつて付与される。かくて、

24、昔おとこ伊勢の齋宮に内の御つかひにてまいりければ、
(伊勢物語、71段)

のごとき、資格をあらわす格助詞「にて」の意味用法が生まれ
てくるのである。

年令をあらわす格助詞「にて」についても、

(古今集、6/324)

25、しがの山ごえにてよめる

(古今集、16/841)

26、ち、がおもひにてよめる
などの例では、「にて」の上接語がそれぞれ「山ごえ」、「おもひ」などの動詞連用形からの転成名詞であることから、「にて」を含めてそれらが、後件の行為のなされている時の状態をあらわし、「にて」は、状態をあらわす格助詞であると処理すべきであろうが、この様な行為のなされている時の状態が、行為をなす時の場面、場合として特別に他の場面、場合と区別される時、時態の意味合いが生じてきて、「にあたって」の意と解する道が開かれ、後にそれが、

27、さいひけるもしるくおとこもせて廿九にてなむうせたまひにける

(大和物語、142段)

の様な事態としての年令をあらわす格助詞「にて」の用法を生み出すに至るのである。こゝに、格助詞「に」の、時をあらわす意味用法の類推が働いたとすれば、よりスムーズに説明がつきそうである。②において考えるよりも、この場合の方が類推は起こり易かったと思う。

以上、状態、手段、方便、資格、年令をあらわす格助詞「にて」の成立については、松村明氏の「に」と「て」とが複合した「にて」という語から格助詞としての機能のものができてきたと見るべきであろう。の指摘は、一見、私案と一致する様ではあるが、氏の場合には、未分明の「にて」から助動詞と格助詞とが機能分化していったとされるのであるから、助動詞「にて」から述定性の消失、「にて」後件の独立性の消失と共

に格助詞「にて」が発生したとする私案とは異なる。資料をみた場合、助動詞の「にて」は万葉集に4例みえ、格助詞「にて」は場所をあらわす用法のみが3例みえているが、この両者を未分明の「にて」からの機能分化した面形とみるか、それとも、場所をあらわす格助詞「にて」は別途の成立とし、万葉集中の助動詞4例に端を発して、状態以下の格助詞と助動詞とが成立したとするか、結局のところ、この場所をあらわす格助詞「にて」の成立をどう説明するのが正しいかが岐路となる。

さて、③と④の考え方の分岐点である、原因をあらわす格助詞「にて」の成立をいかに処理するか、を考えていくこととしたい。今、原因、手段の意をあらわし得る「によりて」の用例の分布をみてみると、別表8の状況を示している。私は、手段の用法は「によりて」からの成立によるものではないと考えるのであるが、それは、宣命以後、手段の意をあらわす「によりて」が全く姿をみせず、一方に言語における交替時に、例えば「とて」成立の起源となった「といひて」が、「とて」成立後も併用され、また場所をあらわす格助詞「にて」においても、「にして」が少ないながら併用されていることなどは異なった現象を呈していることから考えてのことである。つまり、「によりて」でもって手段をあらわす例が宣命以後、祝詞を除いて和文にないのは別途に成立した格助詞「にて」に全くその表現を委ねた結果と考えるのである。ところが、原因をあらわす格助詞「にて」の場合には事情が異なり、起源とみられる「によりて」も「にて」に併行して使用がみられ、「とて」や、場所をあらわす格助詞「にて」の場合と同様の傾向をみせている。「によりて」、「に

て」が類似した表現場面になつている場合のあることも、

28、夏虫の身をいたづらになすこともひとつおもひによりて
なりけり (古今集11/544)

29、京にては、がおもひにてひさしうまからでかたか、た
に侍ける人にいひつかはしける (後撰集、16/1194)

などにみられるところである。「によりて」、「にて」の上接
語は、共に転成名詞「おもひ」である。以上からして、

「によりて」↓原因をあらわす格助詞「にて」

の過程を認めるが、この過程をもたらしめた背景に、資料29の「お
もひ」が動詞連用形からの転成名詞であることから知れる様
に、状態をあらわす格助詞「にて」の前件が後件の行為をも
たらず必然的傾向をもてば、原因の意をあらわし得る様になる
という状況のあつたことは考えられる。

30、かゝるあひだにふなぎみの病者もとよりこちこちしきひ
とにてかやうのことさらにしらざりけり

(土左日記、53ページ)

などは原因への道を開いていく助動詞の例ではなからうか。こ
こでは④の考え方を基本としつゝ、③も同時に補足的な推進
力として力のあつたということを考える。

以上、和文において格助詞「にて」の成立をみてきたが、漢
文訓読の世界では、格助詞「にて」は場所をあらわすものに限
定され、用例も極少なく、「にして」が大半を占めている。な
お、原因、手段はもつぱら「によりて」、資格は「として」で
もつて表現されている。

これまで述べたところ、私は「にありて」、「にして」

を起源として、場所をあらわす格助詞「にて」を成立に導びい
た力を奈辺に求めるかということについて言えば、万葉集にお
ける資料2、3にあつては、係助詞「も」を付して強意を表現
する必要と、字余りを避ける意志とが同時にあつたことを認め
得る。それは別表4にみる「よそ」に下接する場合も同様であ
る。共に音数律の調整の必要がその力である。また、別表2の
場所をあらわす格助詞「にて」が万葉集にその初例がみえるの
に對し、別表3の状態、手段、方便、資格、年令をあらわす格
助詞「にて」は、資料による限りでは、初出例が竹取物語の地
の文に、和歌ではずつと遅く、伊勢物語ではじめてみえている。
これは一方が音数律の調整の必要から字余りを避けるために、
「にして」より「し」を略して音数を減ずることによつて成立
し、一方が音数律の調整の必要とは無縁の、状態をあらわす助
動詞「にて」から、音数を減ずる作業を持つことなく成立し、
意味用法を自身内部で拡大していったことを端的に物語ってい
ると思う。これは先の私の格助詞「にて」成立についての説明
を肯定するものである。原因をあらわす格助詞「にて」につい
ても、これが「によりて」から音数律の調整の必要によつて成立
したという様なことでないことは、和歌にこの用法が皆無であ
ることからして判ぜられる。

註12、全意味用法とは、場所、状態、原因、手段、方便、資格、年令の
意味用法を指して用いた。

13、逆に、状態性の体言を上接せずに状態をあらわす格助詞「にて」が
生まれることはなかつたであろうことは、資料14相当の文型をもつ

資料30において、「にて」が状態をあらわすことなくあることから明らかである。

14、「事態」を客観的概念、「状態」を主観的概念という使い分けはしていない。

15、松村氏の前掲書59ページ、鈴木氏の前掲書307ページ参照。

16、○で囲ったのは、格助詞「にて」の原因と手段をあらわす用法の例を数値でそれぞれ示したものである。

17、祝詞は宣命の時代にまで遡りうる表現形式とみる。

(四) おわりに

以上、格助詞「にて」の全意味用法の成立過程について述べたが、課題としての、この「言語における交替現象の具」を考ふるに、次の二点が抽象されるようである。

(A)「辞＋詞＋辞」↓「辞＋辞＋辞」↓「辞」という過程と、「辞」（助動詞）が述定性を失ない、別の「辞」（助詞）を作るといふ形とが、言語における交替現象としてみられるが、一たび成立した「辞」はその後、独自に意味用法を拡大する。

(B)「辞」成立の起源となった「辞＋詞＋辞」、「辞＋辞＋辞」は、「辞」成立後も併行して使用される。（但し、慣用的に固定した表現は除く。）

この二点については、さらに傍証を求めて検証していかなくてはならない。吉田金彦氏の「否定辞『で』『ずして』の用法」「國語學」第52集）、それに春日和男氏の「存在詞に関する研究」307

— 310 ページの「ずて」「ずして」に関する論考をも再検討しながら、「とて」「にて」「ずて」において、言語における交替現象の一結論を求める心積りである。ただ、これまでの調査で言語交替の類型として、場所をあらわす格助詞「にして」「にて」、「かくして」「かくて」の一群と、否定辞「ずして」「ずて」、「形容詞連用形＋して」「形容詞連用形＋て」の一群との異なった交替の過程をもつ二つを考えているが、この点については、別に稿を準備するつもりである。かてて加えて、和文と漢文訓読文、その他の位相の異なる表現様式相互が、いかに影響しあいながら存在していたか、この点の判断は、言語交替を論ずる場合にながしろにできない問題を含んでいるように思う。

（付記）宣命は「続日本紀宣命講」、歌合は萩谷朴氏の「歌合大成」の内、寛平五年前の資料を、新撰万葉集は北岡文庫の「新撰万葉集」、後撰集は「国歌大系本」（小松茂美氏の「後撰和歌集 校本と研究」を別に異本資料として用いた。）について調査し、それ以外はすべて、岩波書店刊の日本古典文学大系本文を用いた。なお資料は異本との校合の上、問題のないものを用いた。出典となった文献にページ数を付したものはいずれも日本古典文学大系本文による。

別表 7 格助詞「にて」(地の文)

徒然草	金槐集	方丈記	新古今集	堤中納言物語	更級日記	紫式部日記	和泉式部日記	かげろふ日記	落窪物語	大和物語	後撰集	伊勢物語	土左日記	祝詞	古今集	新撰万葉集	歌合	竹取物語	万葉集	宣命	日本書紀	古事記		
35			66	5	10	11	2	20	12	8	44	11	10		48		1	2						場所
5		(1)		3	2	8	3	24	18	6		8	3		6			3						状態
2			1			1	2	1	9	1	4							1						原因
15			2	9	5	4	2	16	6	5+(1)	4	1			2		1	[1]						手段
			1	1	1	4		2		1	2	2			5									方便
2			7	2		2	1	1	2	6	2	8	2											資格
2						(1)			4	1					(1)									年令(時)
															不明 1									

別表 8 「によりて」(／は未調査)

大和物語	後撰集	伊勢物語	土左日記	祝詞	古今集	新撰万葉集	歌合	竹取物語	万葉集	宣命	日本書紀	古事記	
⑤+(1)	④	①		3	②		①	(1)	3	/	/		手 段
2 ①	4 ④	2	1	7	1			2 ②	11	45	/	/	原因